やまと万葉がたり

痛足川（あなしがは） 川波立ちぬ 巻目（まきもく）の 由槻（ゆつき）が嶽（たけ）に 雲居（くもゐ）立てるらし

柿本人麻呂歌集（巻七・一〇八七）

「万葉集」の楽しみ方は、歌を文字で読むだけではありません。もちろん、声に出してもいいし、時には、歌に詠まれている場所に出かけてみることも必要です。もちろん、必ずしも歌に詠まれた場所が特定できるとは限りません。ある意味、妄想で楽しむ「万葉集」の世界です。ただ、何もない風景から古代を妄想できるのは、相当の上級者です。そうでない方は、万葉歌が刻まれた歌碑を探しに出かけるのもおすすめです。今日の歌は、桜井市にある歌碑からの一首です。

歌碑の揮毫（きごう）者は、著名な版画家・棟方志功氏。檜原神社の北側の道を進み、纏向川（痛足川）を越えてすぐ、道路から少し下った竹やぶの前に設置されています。刻面の左上には山や川と思われる絵も添えてあり、棟方氏らしい趣向の珍しい歌碑です。

この歌は「柿本人麻呂歌集」から引用された一首です。「万葉集」に載る「柿本人麻呂歌集」の歌には、巻向（巻目）を詠んだ歌が多くみられます。例えば、「巻向の山辺（へ）とよみて行く水の水沫（みなわ）のごとし世の人われは」（巻七・一二六九）という歌。世間に生きる私は、巻向の山辺を流れる川の水泡のようだといい、世間無常の観念を詠んだ早い時期の歌であるといわれています。万葉びとたちは巻向の自然を通して、自らを深く見つめる目を養ったのだとえます。

由槻（弓月）が岳は巻向山の峰の古称で、万葉歌には雲や霞が立つ景が好んで詠まれました。痛足川の水がとうとうと流れる音を契機に、由槻が岳に湧き立っているだろう雲の風景へと転ずる――聴覚から視覚に見事に移り変わる、動画のような一首です。

万葉文化館では、棟方志功氏が疎開していた富山県福光町（現南砺市）時代の作品を中心とした特別展を11月17日まで開催しています。今回ご紹介した歌碑の原画も展示しています。展覧会をご覧いただき、ぜひ巻向へもお出かけください。

（県立万葉文化館主任研究員・大谷歩）

＝次回は16日

【訳】痛足川には川波が騒ぎ立って来た。巻目の由槻が岳に雲が湧き起こっているらしい。

初春の　初子の今日の　玉箒
手に執るからに　ゆらく玉の緒

大伴家持（巻二十・四四九三）

やまと
万葉がたり

この歌は、758（天平宝字2）年の正月3日に催された初子の儀式に関連して詠まれた歌です。

なぜそんな季節外れの歌をいま紹介するのか、とご不審に思われるかもしれません。実はその儀式の際に使用された玉箒が現存しており、今月26日から始まる第71回正倉院展に出陳されるようなのです。

初子とは、各月の最初の子の日のことですが、特に一年で最初の子の日に行われる宮中の儀式を指します。天皇が農耕を象徴する辛鋤を、皇后が養蚕を象徴する玉箒を用いて、豊作と養蚕の成功とを祈願する儀式が行われます。

この歌は、その初子の儀式の後に、玉箒を飾って催された宴席で披露されることを想定して詠まれました。作者である大伴家持自身がそう記しているのですが、実際には大蔵省の政務のために宴席には参加できず、歌を奏上できなかったともあります。この時の宴では、各自の能力に応じて心中を詩や歌にせよという勅命が下り、皇族や廷臣らは思い思いに詩や歌を作ったようですが、それらの作品はまだ入手できていない、とも家持は記しています。

玉飾りの付いた箒を手にとるとゆらゆらと揺れ、それにより魂の活動が増幅されることを表現した、祝意の籠もった歌です。公の場で披露できず、家持はさぞかし残念だったことだろうと思います。

それにしても、当時の儀式で実際に用いられた子日手辛鋤と子日目利箒が、1200年以上もの間、一度も土に埋もれることなく伝存したということには驚嘆します。その間、日本列島は幾度もの戦火や災害に見舞われ、それをくぐり抜けるためにどれほどの有名、無名の人々が尽力してきたのだろうと思うと、感慨深いものがあります。

【訳】新春の初子の今日の玉箒は、手にとるだけで揺れる玉の緒よ。

（県立万葉文化館指導研究員・井上さやか）

＝次回は11月6日